審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名　岩本　馨

本論は日本の近世都市空間を「関係論」という新たな視角から捉えることを試みたものである。従来の都市史研究、とりわけ空間論をベースとした既往研究は個別の都市をひとつの完結したものと捉える傾向にあり、それは必然的に都市空間を固定的、静的に描くという結果をもたらした。しかしながら都市は単独で成立しているわけではなく、さまざまな社会的諸集団や他の都市・地域との複雑な動的ネットワークのなかで存在しているのであって、こうした関係構造をいかに空間論に取り込むかが課題として残っていた。本論はまさに上記の難問に正面から取り組み、都市空間の存在形態を関係論として位置づけることに挑戦した意欲作である。

論文は日本近世都市史研究のレビューと本論の方法・目的を述べた序章、３部構成の本論（各部に補論各１あり）、結論を述べた終章からなる。

本論は第Ⅰ部で幕藩関係によって生ずる武家地空間の動的な変化を扱い、第２部では巡礼や由緒などいわば物語的な関係の生成に着目する。第３部では学知のあり方と全国に展開する売り場を通して、近世固有の関係構造がいかに都市を規定していたかを明らかにしている。以下、各部の具体的内容をみよう。

第１部では、まず第１章で、紀州藩主であった徳川吉宗の将軍就任に伴い、２００名を超える吉宗家臣団が幕臣化し、江戸に移住するという特異な事象を分析し、第２章では、甲府城下町が直轄化されることによって江戸から派遣された勤番士の武家屋敷が形成されてゆくプロセスが明らかにされる。続く第３章では水戸城下町の解体過程を水戸藩士の江戸在府への進展を通して描き出している。これら３つのケースはいずれも一見特異例とみることもできるが、近世幕藩体制下ではこうした武士団の大量移動が少なからず行われたことを想起すると、むしろごく一般的な事象であったということができる。また「鉢植え」とも呼ばれる武士の都市間移動は、移転元の都市と移転先の都市の文脈が居住地に色濃く刻印される。本論では都市関係論という視角からこの問題に鋭く迫っている。

第Ⅱ部は秩父観音霊場における巡礼ルートの変化と意味を考察した第４章、秩父における札所と別当寺の存在形態を妙音寺を素材に個別実証した第５章、古代以来の港町敦賀における時宗集団の由緒形成と都市のおける意味の付与（物語の創出）を「砂持ち」を通して跡付けた第６章からなる。

秩父札所の巡礼ルートは初期から中期にかけて大きく変更されるが、それは地方の一観音霊場に過ぎなかった秩父が巨大都市江戸と密接なかかわりをみせることと大きく関係していた。また各地（とりわけ江戸）からの巡礼者を受け入れる札所について、妙音寺では社会関係の４つのレベル（信者・巡礼者との関係、本寺との関係、他の別当寺との関係、地域社会の関係）に応じてさまざまなレベルの場と空間を創出していた事実を明らかにした。

第６章の敦賀と題材とした論考は、敦賀の都市空間の近世を通じての変容を、「遊行の砂持ち」という中世時宗集団の都市改造の物語が多様な社会集団固有の論理として読み替えられ、受容されていくプロセスを追ったもので、都市のソフト面における関係構造を明らかにしたものといえる。

以上の３章の個別研究は、従来この種の問題を取り上げた研究は皆無であっただけに、きわめて新しい論点が提示されており、本論の斬新な方法論の有効性と可能性が確認できる。

第Ⅲ部は、近世最大の私塾である豊後国日田咸宜園と日田の都市空間を学知のネットワークという観点から捉えなおした第７章と、富山の売薬業の売り場の展開と城下町富山との関係を明らかにした第８章からなる。都市の関係論といえば通常、商品流通が大きく取り上げられることになるが、近世の知の全国的ネットワークと在地の空間分掌のあり方や売り場と富山城下町の家屋敷の権利上の互換性、売り場の諸類型などの事実解明から、都市関係論を格段に拡大・深化させることに成功した。

以上のように、本論は従来ほとんど本格的に試みられなかった、都市空間の関係構造を具体的な個別研究を積み重ねることによって、一定の方法論にまで高めた画期的な研究と評価することができ、学界に裨益するところ大である。よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。